

おそろい兄妹・3　　くユマとエマく　　(上)

(試読版)

## 目次

序章      ハート柄ロンパース

## 第一章      おそろいおむつとベビー服

- (一)      花柄紙おむつ
- (二)      ブラウス風ロンパース×ジャンパースカート
- (三)      うさぎちゃんスタイセット

## 第二章      白と黄色のおもしろしを

- (一)      うさぎちゃん着ぐるみロンパース
- (二)      重ね着風チュニック
- (三)      ジャンパースカート（名前入り）

## 第三章      恥と快樂のベビーデビュー

- (一)      スカートつきロンパース
- (二)      さくらんぼおむつカバー
- (三)      セーラーマリンブルマードレス

間      うさぎちゃんモンキーパンツ

## 登場人物

朝倉 雄馬（あさくら ゆうま）……一八歳の浪人生。

朝倉 絵麻（あさくら えま）……雄馬の妹。いやいや期。

朝倉 志真（あさくら しま）……雄馬と絵麻の母親。元デザイナー。

一条 璃那（いちじょう りな）……雄馬の幼馴染。専門学校生。

一条 神那（いちじょう かなな）……璃那の母親。手芸店オーナー。

大友みすず（おおとも みすず）……専門学校生。璃那の友人。

相良久子（さがら ひさこ）……専門学校生。璃那の友人。

## 序章 ハート柄ロンパース

住宅街に夜のとばりが下り、春霞に煙る月が、中天に輝く。

遠くに見える駅前のビル群はいまだ明るく、夜空の星すら圧するほどの光を放っていたが、山を切り拓いて造成された住宅地はしんと静まりかえり、眠りにについている。

その一角にある、朝倉家の二階――

「……………」

長男である朝倉雄馬は、床に敷かれたマットレスの上で、おなかにタオルケットをかけたまま、暗闇の中でじっと天井を見上げていた。

この春に高校を卒業したばかりの一八歳。といっても大学生でも、働いているわけでもなく、大学受験のために一年間勉強しなおす、いわゆる浪人の身だった。年の割に小柄な一六〇センチ半ばで童顔、体格も華奢なため、外見的には高校生と言っても通りそうだ。

いや、それどころか――

「はあ……」

雄馬はちらりと視線を下げ、自分の体を見下ろす。

彼が着ているのは、いつものパジャマではない。

まるで少女のような、水色のハートがプリントされた服だった。肩口から先は水色で、小さく膨らんだパフスリーブになっている。

少年にとつては恥ずかしい、少女のようなデザイン。しかしそんなことは、まだ些細な問題だった。

それは、ロンパースと呼ばれるベビー服であつた。

普通のシャツと違い、前後の裾は逆三角形の形になっていて、その先にスナップボタンが並んでいる。それをまた下で止めることによつて、赤ちゃんがつけているおむつを隠しながら、交換するときにいちいち脱がせなくてもよい構造になっている。

本来なら、隣ですやすやと寝息を立てている絵麻――雄馬の半分ほどしか身長のない赤ちゃんが着るような服である。

いや、ちようどいやいや期に差し掛かった、絵麻くらいの年齢の赤ちゃんでも、もう卒業していることが多い。自分ではいいいたり、立ち上がったりでできるようになると、普通に脱がせられるセレートタイプのほうが便利になるのだ。

それをロンパースを着せている理由は、ほとんど母親の趣味だった。

「せっかくなんだから、可愛いベビー服をずっと着せてあげたいじゃない」

そんな母親のこだわりで、絵麻はすこしずつ歩けるようになった今でもロンパースを着せられていた。こちらはピンクのハート柄で、パフスリーブもピンクの切り替えだ。

それはまさに雄馬と「おそろい」——いや、逆だ。雄馬のほうが、妹と「おそろい」のロンパースを着せられているのである。

（お兄ちゃんが水色で、エマちゃんがピンク。ふふっ、兄妹「おそろい」ね）

着せながらそう言った母親の声が、雄馬の耳の奥にこびりついている。

彼女は時々寝返りを打ちながら、すやすやと寝息を立てていた。

（なにが「おそろい」だ……俺にこんなベビー服を着せるなんて、絶対おかしいよ……）

（しかもわざわざ、手作りまでして……）

一六〇センチサイズのロンパースなど、普通のベビー用品店や衣料品店で売っているわけがない。最近では通信販売や、個人製作などで取り扱っているところもあるが、いま、雄馬と絵麻が着せられているのは母親の手作りだった。もともと女兒服ブランドでデザイナーをしていた母親謹製とあって、既製品に負けないほどしっかりした縫製だ。

もつとも、だからと言って雄馬の恥ずかしさが減衰するわけではなかったが。

（これじゃあまるで、妹と同年の赤ちゃんみたいじゃないか……）

（いくら、いやいやするようになった妹に言うことをきかせるためだからって、ここまで「おそろい」にしないで……）

当たり前だが、妹と「おそろい」のロンパースを着ているのは、雄馬自身という意味ではない。いやいや期に入り「おにーたんといっちゃやないと、いや！」と言って、言うことをきかなくなった妹に困り果てた母親が、「なら雄馬にベビー服を着せればいい」と、雄馬に妹との「おそろい」生活を命じたのだ。

闇の中、雄馬は頭上を睨む。

そこに下がっているのは、星や馬、小さな人形など色とりどりの飾りが吊るされた、円形の玩具——いわゆる、メリーサークルだった。天井は明るいピンクで、壁は上半分がピンクと白のストライプ、下半分が濃いピンクになっている。床に敷いているマットレスの下も、花や少女のイラストが描かれたカーペットだ。

ここは、雄馬の部屋ではない。

絵麻が生活している、ベビールームだ。ロンパースを着せられた雄馬は、「エマちゃんと一緒に寝るのよ」と言われてこの部屋に押し込められ、並べて敷かれたマットレスの上になっっているのだった。

（まだ、八時なのに……）

少年にとっては、まだまだ夜のうちにも入らない。遊ぶにしても、勉強するにしても、秘密の行為に及ぶにしても、これからが本番といった時間である。眠気が来るはずもなく、ただまんじりともせずに冴えた目で闇を睨む。

さらに、「おそろい」なのはロンパースだけではなく――

「んっ……」

雄馬は闇の中で、内腿をこすり合わせるように身をよじった。

ロンパースの内側、ちょうど下腹部のあたりが熱気をもっている。腰回りは暗闇でも判るほどに不自然に膨らんで、股間がうまく閉じられず、その両脚は隣で寝ている絵麻と同様、仰向けになった蛙のようにOの字に開いていた。

（うう、おちんちんとおしりのまわりが、もこもこする……!）

その股間を包むのは、少年用のトランクスでも、ブリーフでもない。

妹と「おそろい」の、表面が花柄になった紙おむつだった。

トランクスに慣れた少年にとってはあまりにも窮屈で、通気性の悪いおむつ。それも厚手のタイプで、たつぷりおもらししても吸収できる代わりに、ロンパースの上からでもふくらみが目立ってしまうし、穿いていると陰部やお尻にもこもことした感触が当たり、脚を閉じることさえうまくできない。

「はあっ……」

ロンパースの中で、存在感を主張する紙おむつ。内側は熱く蒸れて、まるで暖かい布団の中に包まれているようで――

「う……」

雄馬はそつと、その股間に手を伸ばす。

おむつの中で蒸れているペニスは、徐々に表面が汗ばんでかゆみを発してくる。

なんとか蒸気を逃がそうと、おむつと太腿の間に指を差し入れると、空気が通って気持ちよかった。

「ほっ……」

もつとも、しょせんは焼け石に水。すぐに再び蒸気がたまって、また同じことの繰り返しになる。

さらに――

「んっ……」

雄馬の喘ぎが、かすかに甘くなる。

少女用のおむつの中に閉じ込められている、少年の器官。

ほとんど目立たないほどの大きだったそれが、次第に大きくなり、立ち上がり始めていた。ロンパースのクロッチより少し上のあたりに、造山運動のような隆起ができて始めている。

（ま、まずい……）

雄馬は顔を引きつらせる。

(勃起、してきちゃってる……!)

もちろんこの場には、少年が昂奮するようなエロ本やAVの類はない。昂奮するような妄想をしたわけでもなく、ましてや隣に寝ている妹に欲情するような異常性癖は持ち合わせていない。

彼が昂奮しているのは、下半身を包んでいるおむつそれ自体の感触のせいだった。

(くそっ……なんで、こんな……)

むらむらと勃起したペニスはあつという間におむつの中で窮屈なほどになり、へそに向かって伸びあがつてゆき、裏筋がおむつに擦れる。それだけで軽い絶頂に達しそうになり、雄馬は悲鳴を殺して身悶えた。

(おむつで、昂奮しちゃうなんて……)

(うう……これも全部、昼間、璃那のやつが……)

雄馬は幼馴染の少女の顔を思い浮かべ、恨みがましい目つきになる。

赤いセルフレームの眼鏡をかけ、前髪をヘアピンで後ろに流しておでこを出し、ちよつと意地悪そうな表情をしていることが多い少女——一条璃那。母親同士が知り合いの上、高校卒業までずっと同じ学校・同じクラスだったという筋金入りの幼馴染だ。雄馬と同年だが、こちらは専門学校に進み、おもに洋裁・ファッション関係の道を進んでいる。

母親が、雄馬を赤ちゃん扱いし始めた主犯ならば、璃那はその共犯、あるいは事後従犯であつた。一緒になって雄馬にベビー服を着せ、おむつを当て——

(それだけならまだしも、あんな……)

(おむつの上からこすって、射精させやがって……!)

昼間の出来事を思い出して、雄馬は歯噛みする。

「お昼寝」の最中に部屋に忍び込んできて、おむつの上から股間をこすって射精へと導いた、璃那の手のひら。

優しく、愛おしげに——しかし執念深く、雄馬の欲望と劣情を刺激して、本意ならざる射精に導くあの感触は、まさに璃那の性格そのままであつた。

そのせいで、雄馬の体は「おむつの感触」と「射精の感覚」を関連付けて記憶し、下半身がおむつに包まれるだけで、昂奮するようになってしまったのである。

特に今のように暗闇で、視覚情報がほぼ遮断されている状況だと、いっそうおむつの感触に敏感になってしまい——

「はあっ……だめ、我慢できない……」

熱を帯びたペニスの疼きに、雄馬は再びおむつと太腿の隙間を広げて、風を通した。表面が湿った竿が冷たくなるが、もはや昂奮を鎮める効果もなく、再びおむつの中で蒸れて、理性がオーバーヒートする。

熱狂する劣情に背中を押されるようにして、手が股間の上を動き始める。

ずりっ、ずりっ、

「んっ……」

怒張するペニスをこすると、昼間の記憶がより鮮明によみがえってくる。恥ずかしいはずなのに、嫌で嫌でたまらないはずなのに、肉体は魂が抜けてしまいそうなほどの昂奮をおぼえていて、思い出すだけでも全身が打ち震える。

（う……だめ、こんなところでこすって出しちゃったら……）

（おむつ交換の時に、また二人に見つかっちゃう……）

（でも、ちよつとだけ……ちよつとだけだから……）

かすかに残った理性が押しとどめようとするが、手の動きは止まらない。おむつと下腹部の間でペニスを圧迫するようにこすると、それだけでも気持ちよくてたまらない。

（おむつを当てられて、ベビー服を着せられて……）

（絵麻と色違いの、水色のジャンパースカートを……！）

昼間、妹と「おそろい」で着せられたベビー服の数々を思い出すと、さらに昂奮が沸き立ってくる。

ブラウス風のロンパースと、ジャンパースカート。

ウサギをモチーフにしたスタイと、ベビー帽子のセット。

同じくウサギモチーフの、着ぐるみロンパース。

さらにおむつ丸出しのチュニツクで、庭先にまで連れ出され――

「んっ……！」

あの時のことを思い出して、絶頂に達した雄馬は微かにうめく。

こすったペニスの内側から、押し出されるようにして精液があふれ、おむつの内側を濡らした。

「はぁっ……」

おむつの中で暴れていたものが、徐々に元の大きさに戻ってゆく。

雄馬はほっと息をついて、おむつの上から手を離す。しかし相変わらず、一向に眠気は訪れない。

（やっぱりおむつをあててるせいで、落ち着いて眠れないな……）

（もこもこして、ゴワゴワして……）

（それに、おもらししたときの、あの、感じ――）

（ふかふかだったおむつがどんどん濡れて、重たく、硬くなっていて……）

（おむつが両脚の間からずっしり垂れさがって、冷たくて、痒くて――）

思い出すだけで気持ちの悪い、あの感覚。



さらにその後の、大きい方のおもらしに至っては、もはや昂奮どころではない戦慄が背筋を駆け抜ける。

柔らかい泥のようなものがお尻いっぱいに溢れ出し、おむつとの間に満ち満ちる感触。便器に張った水の中に出した時とは比較にならないほど強烈な、剥き出しの悪臭。立ち上がったときに垂れ下がったおむつの、ずっしりとした重さ。

あれに比べれば、乾いたふわふわのおむつのほうがずっとまだ。おむつが股間からお尻を包んでいる感覚は、雄馬の胸を甘く締め付けて――

（い、いや！ 俺はもう、一八の男なんだ！ むりやり着せられてるだけで、おむつだって、ベビー服だって、恥ずかしくて恥ずかしくて、しょうがないんだから……）

雄馬は心の中で繰り返す。間違っではないのだが、それはどこか自分に言い聞かせているようでもあった。

（おむつなんか……絶対に、好きになつたりしないんだから……！）

暗闇の中、決意を新たにする雄馬。

（もとはと言えば母さんが、あんな無茶な「お願い」をするから……）

（あの時ちゃんと断っておけば、こんなことにはならなかったのに……）

そして眠れぬままに、今日一日のことを思い出す――